

在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立（第1報）

：ホーム・ヘルパーの介護態度との関連

富山大学保健管理センター 竹澤みどり

A study of dependence and independence on the home helper among older people receiving care at home (1): Relation to the caring attitudes of home helper

Midori Takezawa (Center for Health Care and Human Science, University of Toyama)

キーワード：依存、自立、高齢者、在宅介護

Key words: dependence, independence, older people, home care

本研究では、高齢者のホーム・ヘルパーへの依存と自立、ホーム・ヘルパーをよりよく活用するために高齢者が行っている様々な工夫、それぞれへの影響因としてホーム・ヘルパーの介護態度について検討した。要介護認定を受け、在宅でホーム・ヘルパーを利用している高齢者129名を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることのできるホーム・ヘルパーに対しては、高齢者は依存を表出しやすく、ヘルパーからの援助提案も多くなされていると感じていることが明らかとなった。自立については、介護態度によって有意な差は見られなかった。また、基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることのできるホーム・ヘルパーに対しては、高齢者はよりよくヘルパーを活用するために自分の意思・要望を主体的に伝えることができるが、そうでない場合には我慢したり妥協したりすることが多くなることが明らかとなった。

問題と目的

総務省（2010）の統計調査によると、平成22年5月1日現在65歳以上の高齢者の占める割合は23.0%にのぼる。さらに、前年同月と比べて日本の総人口は0.07%減少しているにもかかわらず65歳以上の高齢者人口のみ1.92%増加している。高齢者の割合は年々増え続けており、ますます日本が高齢化している。

加齢による身体・認知機能の低下を完全に回避することは難しく、年を経るにつれ他者からの助力を借りなければならない機会が増えてくる。しかし、高齢者を支える側となる65歳未満の人口は減っており、十分な助力を提供することが困難になっているのが現実であろう。そのため、現代社

会では高齢者に自立を求める傾向が強まっているという指摘もある（杉井、2002）。したがって、可能な部分では自立して活動し、一人では実行できない部分では必要に応じて他者へ依存することが必要となっている。Baltes（1996）は、こうした依存と自立の在り方こそが現実的で、高齢者における適応的な依存のあり方であり、それが結果的にサクセスフル・エイジングに寄与するとしている。つまり、高齢者の運動・認知機能のレベルに合わせて、依存と自立の両方がバランスよく共存し、機能していることが重要であると考えられる。竹澤（2009, 2010）は、在宅でホーム・ヘルパー（以下、ヘルパー）を活用している要介護（または支援）認定を受けた高齢者の、ヘルパーへの依存構造を明らかにすることを目的に面接調

査を行った。特に、ヘルパーとの関係が良く、ヘルパーの利用によく適応している高齢者を対象とすることによって、より適応的な依存の在り方とはどのようなものなのかについて検討した。その結果、依存には大きく分けて2種類あることが見いだされた。高齢者が主体的にヘルパーに要望を伝えて依存する「能動的依存」と、ヘルパーが必要と判断した援助の提供を提案し、高齢者が必要であると判断した時にその援助を受け入れるという「受動的・選択的依存」である。さらに、依存と自立が共存し、それぞれが相補的に機能していることを指摘している。この結果は、Baltes (1996) の適応的な依存の在り方に関する指摘と一致している。また、竹澤 (2009, 2010) は、ヘルパーをよりよく活用するために高齢者が様々な工夫 (自身の要望をきちんと主張する、できるところはあらかじめ準備をしておく、ヘルパーが快適に仕事ができるように気を使う、ヘルパーの援助を受け入れ、自身を委ねる) を主体的に行っていることを明らかにした。さらに、ヘルパー利用によく適応している高齢者は受動的に援助をただ受ける受身的な存在ではなく、ヘルパーをよりよく活用するために様々な工夫を主体的に行う、より能動的な存在であることを指摘している。また、このような工夫が、高齢者自身の依存をよりよく機能させることに寄与しているのではないかと考察している。しかし、全ての高齢者が自身の運動・認知能力に合わせて依存と自立のバランスを取りながら共存させ、どちらも十分に機能させることができているわけではないだろう。それでは、これを可能とするためには何が必要なのであろうか。本研究では、在宅でヘルパーを利用している要介護 (または支援) 認定を受けた高齢者における依存と自立、ヘルパーをよりよく活用するために高齢者が行っている工夫に影響を与える要因について検討することを目的とする。

高齢者とヘルパーとの間のより良い援助関係は主にヘルパーの態度とかわり方によって表され (須加、2003)、ヘルパーがどのような態度を取るかによって、利用者が援助を申し出るか否かが大

きく影響を受けることが指摘されている (須加、2007)。そこで、本研究ではヘルパー側の要因としてヘルパーの介護態度に注目する。ヘルパーがより望ましい態度で介護を行ってれば、高齢者は必要な時にはヘルパーに依存し、ヘルパーをよりよく活用するための工夫を積極的に行うのではないかと推測される。本研究ではヘルパーの介護態度と、高齢者のヘルパーへの依存と自立およびヘルパー活用の工夫との関連を検討することを目的とする。

方法

調査手続き：社会福祉協議会を通してケア・マネージャーに調査協力を依頼し、在宅でヘルパーを利用している高齢者に調査票を配布してもらった。調査票と一緒に本研究に関する説明を記載した用紙と切手を張った返信用封筒を同封した。回答後、調査票を返信用封筒を用いて返送してもらった。希望者には謝礼として500円分の図書カードを送付した。275部配布し、139部回収された (回収率50.5%)。そのうち、欠損値の多いものを除いた129名を分析対象とした。

被調査対象者：要介護 (または支援) 認定を受け、在宅でヘルパーを利用している129名 (男性39名・女性90名) を対象とした。そのうち家族と同居している人は63名 (48.8%)、独居の人は64名 (49.6%)、不明が2名 (1.6%) であった。平均年齢は80.23歳 ($SD=7.95$)、ヘルパー利用期間は平均5.8

Table 1 被調査者の要支援・要介護度

要介護 (要支援)度	人数(%)
要支援1	21(16.3%)
要支援2	38(29.5%)
要介護1	21(16.3%)
要介護2	22(17.1%)
要介護3	7(5.4%)
要介護4	12(9.3%)
要介護5	2(1.6%)
不明	6(4.7%)
合計	129

年 ($SD=5.87$) であった。対象者の介護レベルを Table 1 に示した。

調査内容：年齢、性別、介護（支援）レベル、家族との同居の有無、ヘルパー利用期間を尋ねた。それに加え、以下の尺度を用いた。

(1) 在宅要介護高齢者のヘルパーへの依存尺度（以下、依存尺度）：竹澤（2009）をもとに、「能動的依存」を表す5項目、「受動的・選択的依存」を表す6項目を独自に作成した。4件法（1：「いつもそうしている」、2：「時々そうしている」、3：「あまりそうしていない」、4：「全くそうしていない」）で回答を求めた。

(2) 在宅高齢者の自立尺度（以下、自立尺度）：竹澤（2009）をもとに全面的にまたは部分的に自分自身で行うことができることは自分で行うという、在宅高齢者の自立的活動を表す5項目を独自に作成した。4件法（1：「いつもそうしている」、2：「時々そうしている」、3：「あまりそうしていない」、4：「全くそうしていない」）で回答を求めた。

(3) 在宅要介護高齢者のヘルパー活用の工夫尺度（以下、工夫尺度）：竹澤（2009）をもとに、在宅要介護高齢者が自宅でヘルパーをよりよく活用するために行っている工夫を表す項目を独自に作成した。自身の要望はきちんと主張するという「主張」を表す5項目、ヘルパーが仕事をしやすいようにできるところは自分で準備をしておくという「準備」を表す4項目、ヘルパーとの関係を良好に保つために様々に気を配るという「気を使う」を表す5項目、ヘルパーの行う仕事について割り切って考えて受け入れ、ヘルパーに自身を委ねるという「受け入れ・委ねる」を表す5項目の合計19項目である。4件法（1：「いつもそうしている」、2：「時々そうしている」、3：「あまりそうしていない」、4：「全くそうしていない」）で回答を求めた。

(4) 訪問介護利用者評価尺度（須賀、2003）：介護におけるヘルパーの態度を測定するために用いた。「基本的な態度」（適切な言葉遣い、自己中心的で配慮のない態度、秘密厳守などに関するヘ

ルパーの基本的な態度を表す項目からなる）、「意向をくみ取る」（要望や隠れたニーズにも沿う、臨機応変な態度、傾聴などを表す項目からなる）の2つの下位尺度からなる。回答しやすいように、質問項目に合わせて回答の選択肢を一部修正した。回答は各質問について5件法（例えば、1：「よくある」、2：「時々ある」、3：「どちらとも言えない」、4：「あまりない」、5「全然ない」など）で求めた。

その他、ヘルパーの仕事に対する満足感と主観的幸福感を測定する尺度が含まれていたが、本分析では用いていない。

倫理的配慮：研究に関する説明を記載した用紙にて、研究の目的と意義について説明した。さらに、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、研究目的以外に利用することはないこと、調査への協力は自由意思に基づくもので、回答しなくても不利益をこうむることがないことを書面にて説明した。無記名で回答を求めたが、希望者には謝品を送付するため氏名と住所の記載を求めた。

調査時期：2009年10月～12月に実施した。

結果と考察

各尺度について

まず、依存尺度、自立尺度、工夫尺度の各回答について得点が高い方が頻度が高くなるように数値を反転させて得点化した（4を1点、3を2点、2を3点、1を4点として得点化）。依存尺度の全11項目に対して因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、固有値の推移や解釈可能性から2因子解が妥当と判断された（Table 2）。第1因子は「受動的・選択的依存」を表す6項目からなり、「受動的・選択的依存」と命名した。第2因子は、「能動的依存」を表す5項目からなり、「能動的依存」と命名した。信頼性係数は、第1因子が $\alpha = .916$ 、第2因子が $\alpha = .820$ であり、尺度の信頼性が確認された。次に、自立尺度の全5項目に対して、一次元性を確認するために主成分

Table 2 「在宅要介護高齢者のホーム・ヘルパーへの依存尺度」因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	F1	F2	共通性
F1 「受動的・選択的依存」 $\alpha = .916$			
私が直接言わなくても、私の状態に合った援助を提案してくれる	.946	-.124	.767
私の体調が悪い場合には、私が言わなくても気づいて対応してくれる	.839	-.046	.659
ヘルパーがいろいろな援助を提案してくれる	.791	.008	.634
私が困っていることを察して、ヘルパーが援助を申し出してくれる	.772	.053	.648
私が言いませぬようなことでも、ヘルパーが気づいてやってくれる	.694	.109	.586
家事の簡単・便利なやり方について、ヘルパーが自主的に教えてくれる	.660	.161	.591
F2 「能動的依存」 $\alpha = .820$			
ヘルパーにやってほしいことがあるときには、直接ヘルパーに依頼するようになっている	-.012	.907	.810
ヘルパーに手伝ってほしいことがあるときには、直接ヘルパーに依頼するようになっている	-.117	.828	.581
ヘルパーに何か教えてほしいことがあれば、直接聞くようになっている	.078	.599	.422
ヘルパーに家事の仕方などやり方を変えてほしい時には、直接依頼するようになっている	.139	.532	.393
困っていることがあれば、直接ヘルパーに相談するようになっている	.333	.362	.390
因子間相関		.614	

Table 3 「在宅高齢者の自立尺度」の主成分分析結果

項目内容	第1主成分	共通性
家事など私ができるところは、私自身でやるようになっている。	.787	.619
料理や掃除など、自分でもできるところはヘルパーと協力しておこなうようになっている。	.715	.512
自分ができるところは、ヘルパーを手伝うようになっている。	.694	.482
自分自身の力でできるように、いろいろな工夫をしている	.684	.468
ヘルパーが仕事しやすいように、できるところはあらかじめ準備するようになっている。	.680	.462
固有値	2.543	

Table 4 「ヘルパー活用の工夫尺度」因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	F1	F2	F3	共通性
F1 「準備」 $\alpha = .902$				
ヘルパーが仕事しやすいように、できるだけ部屋や台所を片付けておくようになっている	.985	-.148	-.189	.672
ヘルパーにあまり負担がかからないように、できるところはあらかじめ準備しておくようになっている	.954	-.082	-.083	.748
ヘルパーが仕事しやすいように、家事の下準備は済ませておくようになっている	.796	.049	-.001	.683
ヘルパーが効率的に仕事ができるように、できるところは自分でやっておくようになっている	.767	.006	.036	.624
F2 「抑制的な態度」 $\alpha = .774$				
ヘルパーの仕事に対して、多少気に食わないことがあっても割り切って考えるようになっている	-.250	.911	-.003	.605
ヘルパーの仕事に対して、多少思うようにいかないことがあっても、ある程度妥協するようにしている	.088	.818	-.081	.718
自分の意向をヘルパーに言いだしにくい	-.033	.610	-.319	.319
ヘルパーに気を使っている	.129	.590	-.258	.383
ヘルパーの仕事に対して、細かいことは気にしないようになっている	.093	.533	.208	.499
F3 「積極的な態度」 $\alpha = .795$				
私がして欲しいことは、ヘルパーにきちんと言葉で伝えるようになっている	-.211	-.108	.836	.535
ヘルパーには、できるだけきちんと意思表示をするようになっている	.010	-.252	.700	.429
私がして欲しくないことは、ヘルパーにきちんと言葉で伝えるようになっている	-.028	-.114	.583	.293
ヘルパーの負担にならないように、何かをお願いをする際にはタイミングを見計らうようになっている	.310	.167	.542	.724
ヘルパーの仕事の邪魔にならないように、話をするようになっている	.236	.302	.380	.558
ヘルパーに過度な負担がかからない程度に、仕事をお願いするようになっている	.323	.165	.362	.494
因子間相関	F1	F2	F3	
	F1	.629	.518	
	F2		.363	
	F3			

分析を行った。その結果、すべての項目が第一主成分に.35以上の負荷量を示したことから、一次元性が確認された (Table 3)。全5項目での信頼性係数は $\alpha = .752$ であり、尺度の信頼性が確認された。さらに、工夫尺度の全19項目に対して因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った。

固有値の推移や解釈可能性から3因子解を採用した。さらに、どの因子においても因子負荷量.35未満の項目、2つ以上の因子に.35以上の負荷量を示す項目を削除して分析を繰り返した。その結果、4項目が削除され、最終的に15項目で3因子が抽出された (Table 4)。第1因子には、「準備」を

表す項目が全て含まれた。ヘルパーが仕事をしやすいように自分でできるところは準備をしておくという内容を示す項目からなり、「準備」と命名した。第2因子は、自分の思うように行かない場合には妥協や我慢をしたり、ヘルパーに気を使ったりなどヘルパーに対する抑制的な態度に関する項目からなり、「抑制的な態度」と命名した。第3因子は、ヘルパーに気を使いながらも自身の要望をきちんと主張するという積極的な態度に関する項目からなり、「積極的な態度」と命名した。「主張」「気を使う」のそれぞれの項目は、より抑制的な態度を表す項目は第2因子へ、より積極的な態度を示す項目は第3因子に分かれ、「受け入れる・委ねる」を表す項目は第2因子に含まれた。信頼性係数は、第1因子が $\alpha = .902$ 、第2因子が $\alpha = .774$ 、第3因子が $\alpha = .795$ であり、尺度の信頼性が確認された。

各変数間の相関を Table 5 に示した。「受動的・選択的依存」と「能動的依存」との間には有意な正の相関がみられた ($r = .61, p < .01$)。因果関係は言及できないが、ヘルパーから必要な援助がよく提案されていると感じている人ほど、能動的な依存も行えていることが分かる。また、依存は自立と対極概念としてとらえられることも多いが、本研究では依存の両下位尺度と自立尺度との間には有意な正の相関がみられた（「受動的・選択的依存」： $r = .36, p < .01$ 、「能動的依存」： $r = .40, p < .01$ ）。このことから、本研究で取り上げた依存と自立は対極概念ではなく、自立的な行動をして

いる人は必要な時にはヘルパーに能動的に依存し、ヘルパーからも必要な援助がよく提案されていると感じていることが分かる。また、工夫尺度の下位尺度「抑制的な態度」と「積極的な態度」は概念的には対極する概念と考えられるが、両者の間には正の相関がみられた ($r = .27, p < .01$)。このことから、抑制的な態度を多く示す人は積極的な態度をあまり示さないということではなく、抑制的な態度と積極的な態度が共存しうることが分かる。したがって、その場面によって、高齢者が抑制的な態度と積極的な態度を使い分けている可能性が推測される。以上のように、依存と自立や抑制的な態度と積極的な態度は概念だけをみると対極に思われるような概念も、実際には両者が共存していると考えられる。竹澤（2010）の面接調査でも、両者が共存していることが見いだされており、本結果によってそれを量的なデータで確認することができた。

基本的属性との関連

依存尺度の二つの下位尺度、自立尺度、工夫尺度について、性差を検討するために性を要因とした、一要因分散分析を行った。その結果、全ての尺度において有意な差は見られなかった。さらに、家族との同居の有無による違いを検討するために同居の有無を要因とした一要因分散分析を行った。その結果、自立においてのみ有意差がみられ ($F(1,105) = 5.12, p < .05$)、同居家族がいる人に比べて同居家族がいない人の方が自立得点が高かった (Table 6)。これは、同居家族がいる場合には家

Table 5 各変数間の相関

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
依存尺度								
I 受動的・選択的依存		.61 **	.36 **	.03	-.09	.33 **	-.40 **	.70 **
II 能動的依存			.40 **	.07	-.05	.51 **	-.22 *	.45 **
III 自立尺度				.71 **	.36 **	.36 **	-.06	.09
ヘルパー活用の工夫尺度								
IV 準備					.49 **	.53 **	-.05	-.04
V 抑制的な態度						.27 **	.32 **	-.30 **
VI 積極的な態度							-.26 **	.31 **
訪問介護利用者評価尺度								
VII 基本的態度								-.64 **
VIII 意向をくみ取る								

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 6 家族との同居の有無における自立尺度の平均 (標準偏差), 分散分析結果

	家族と同居	独居	F値
<i>n</i>	50	57	
自立尺度	15.20 (3.45)	16.64 (3.17)	5.12 *

* $p < .05$

Table 7 ヘルパーの介護態度の高低における依存尺度及び自立尺度の平均 (標準偏差), 分散分析結果

	基本的な態度			意向をくみ取る		
	低群	高群	F値	低群	高群	F値
<i>n</i>	49	71		74	48	
依存尺度						
受動的・選択的依存	19.96 (3.88)	16.74 (4.06)	16.12 **	15.72 (3.97)	20.82 (2.98)	52.76 **
能動的依存	17.39 (2.77)	15.70 (2.72)	9.64 **	15.56 (2.81)	17.53 (2.63)	13.68 **
自立尺度	16.25 (3.45)	15.64 (3.26)	0.85 <i>n.s.</i>	15.45 (3.64)	16.30 (3.24)	1.53 <i>n.s.</i>

** $p < .01$

族に頼むことができるが、家族と同居していない場合には必然的に自分自身でなんとか行わなければならない機会が増えてくるためであると考えられる。また、介護（支援）レベルとの関係を検討するために、上記の3つの尺度と介護（支援）レベルとの間のスピアマンの順位相関係数を算出した。その結果、自立尺度との間にのみ有意な負の相関がみられた ($r_s = -.23, p < .05$)。介護レベルが高くなると、必然的に自分自身で行うことができる活動が減っていくため、介護レベルと自立尺度との間に負の相関がみられたと考えられる。

高齢者の依存・自立とヘルパーの介護態度との関連

依存尺度等と同様に、訪問介護利用者評価尺度の各回答に対して、得点が高くなるほどその傾向が強くなるよう数値を反転させて得点化した。訪問介護利用者評価尺度の下位尺度「基本的な態度」（基本的な態度ができていないほど得点が高くなる）および「意向をくみ取る」を、平均点を基準にそれぞれ高群/低群に分けた。「基本的な態度」の高群/低群を独立変数、依存尺度の2つの下位尺度および自立尺度を従属変数として、それぞれ一要因分散分析を行った。その結果、依存尺度の両下位尺度において有意差が見られ（「受動的・選択的依存」： $F(1,97)=16.12, p < .001$ 、「能動的依存」： $F(1,104)=9.64, p < .01$ ）、高群は低群に比べて「能動的依存」「受動的・選択的依存」の

どちらの得点も低かった (Table 7)。「意向をくみ取る」においても同様の分析を行った結果、依存尺度の両下位尺度において有意差が見られ（「受動的・選択的依存」： $F(1,96)=52.76, p < .001$ 、「能動的依存」： $F(1,105)=13.68, p < .001$ ）、高群は低群に比べて「能動的依存」「受動的・選択的依存」のどちらの得点も高かった (Table 7)。以上より、基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることのできるヘルパーに対しては、高齢者は依存を抑制しにくく、表出しやすいこと、能動的依存の不足部分を補うと考えられるヘルパーからの援助の提案も多くなされていると感じていることが明らかとなった。一方で、ヘルパーの態度によって自立に違いは見られなかった。この理由としては以下のことが考えられる。ヘルパーが担当高齢者の意向をくみ取ることができなかつたり、基本的な態度ができていない場合には、高齢者は依存しにくくなる。その結果、必然的に自分で行う活動が多くなるため自立的行動が多くなり得る。一方で、ヘルパーが基本的な態度ができており、担当高齢者の意向をくみ取ることができる場合にヘルパーと協力して行う自立的行動が増える可能性があると考えられる。つまり、ヘルパーが基本的な態度ができ、意向をくみ取ることができているときにも、できていない時にも自立的行動が多くなる可能性があり、その影響が相殺されてしまった可能性が考えられる。この点に関して

Table 8 ヘルパーの介護態度の高低におけるヘルパー活用の工夫尺度の平均（標準偏差），分散分析結果

n	基本的態度			意向をくみ取る		
	低群	高群	F値	低群	高群	F値
	49	71		74	48	
準備	13.34 (2.99)	13.00 (3.34)	0.31 <i>n.s</i>	13.05 (3.57)	13.14 (3.05)	0.02 <i>n.s</i>
抑制的な態度	13.54 (3.56)	15.48 (2.95)	8.98 **	15.36 (3.07)	13.59 (3.49)	7.39 **
積極的な態度	21.16 (3.10)	19.40 (3.37)	7.91 **	19.29 (3.57)	21.28 (2.91)	10.28 **

** $p < .01$

は、更なる検討が必要であろう。

高齢者のヘルパー活用の工夫とヘルパーの介護態度との関連

「基本的態度」の高群/低群を独立変数、工夫尺度の3つの下位尺度を従属変数としてそれぞれ一要因分散分析を行った。その結果「抑制的態度」「積極的態度」においてのみ有意差が見られ（「抑制的態度」： $F(1,105)=8.98, p<.01$ 、「積極的態度」： $F(1,106)=7.91, p<.01$ ）、高群は低群に比べてより高齢者のヘルパーに対する「抑制的態度」の得点が高く、「積極的態度」の得点が低かった（Table 8）。「意向をくみ取る」においても同様の分析を行った結果、「抑制的態度」「積極的態度」においてのみ有意差が見られ（「抑制的態度」： $F(1,106)=7.39, p<.01$ 、「積極的態度」： $F(1,109)=10.28, p<.01$ ）、高群は低群に比べてより「抑制的態度」の得点が低く、「積極的態度」の得点が高かった（Table 8）。以上より、基本的な態度ができており高齢者の意向をくみとることができるヘルパーに対しては、高齢者はよりよくヘルパーを活用するために自分の意思・要望を主体的に伝えることができるが、そうでない場合には我慢したり妥協したりすることが多くなることが明らかとなった。

本研究の限界と今後の課題

本研究ではヘルパーが基本的な態度ができ、高齢者の意向を良くくみ取ることができている方が、高齢者は必要な時には積極的に依存することができることが示された。しかし、必ずしも依存することだけが望ましいとは限らない。行きすぎた依

存は、高齢者の自立的行動を減少させ、身体・認知機能の衰えを加速させる可能性もある。したがって、過度に依存してしまうこともまた問題である。今後は、具体的にどのようにして依存と自立のバランスを取っていくのがより適応的であるかを検討する必要があるだろう。

また、今回の分析には介護レベルの要因を組み込んでいない。依存や自立は介護レベルに直接影響を受ける重要な要因であると考えられる。しかし、本調査ではそれぞれの介護レベルの被調査者を一定人数集めることが困難であったため、介護レベルの要因を組み込んだ分析を行うことができなかった。今後は、可能であれば様々な介護レベルの被調査者を集め、それぞれの介護レベルに合った依存と自立について検討することが必要であると考えられる。

まとめ

本研究では、在宅でヘルパーを利用している要介護（または支援）認定を受けた高齢者を対象に調査を行った。そして、高齢者のヘルパーへの依存と自立、ヘルパーをよりよく活用するために高齢者が行っている工夫、それぞれへの影響因としてヘルパーの介護態度について検討した。その結果、基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることのできるヘルパーに対しては、高齢者は依存を表出しやすく、ヘルパーからの援助の提案も多くなされていると感じていることが明らかとなった。自立については、介護態度によって有意な差は見られなかった。また、基本的な態度ができており、高齢者の意向をくみ取ることので

きるヘルパーに対しては、高齢者はよりよくヘルパーを活用するために自分の意思・要望を主体的に伝えることができるが、そうでない場合には我慢したり妥協したりすることが多くなることが明らかとなった。

引用文献

- Baltes, M.M. (1996). The many faces of dependency in old age. Cambridge University Press.
- 内閣府 (2010). 高齢化の状況, 平成22年度版 高齢者社会白書, pp.2-19.
- 総務省 (2010). 人口推計月報 (平成22年5月確定値). <<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201010.pdf>> (2010年11月11日)
- 須加美明 (2003). 訪問介護の質を測る利用者満足度尺度案の開発 老年社会科学, 25, 325-338.
- 須加美明 (2007). サービスを拒む利用者との関係形成 社会関係研究, 12, 119-132.
- 杉井潤子 (2002). 老人虐待 畠中宗一 (編)

自立と甘えの社会学 世界思想社 pp.79-99.
竹澤みどり (2009). 在宅高齢者のホーム・ヘルパーへの依存構造 - 面接調査から - 日本健康心理学会第22回大会, 147.

竹澤みどり (2010). 在宅要介護高齢者とホーム・ヘルパー間の依存と自立の構造 - 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析から - ヒューマン・ケア研究, 11, 70-85.

付記

お忙しい中、快く調査に協力して下さったケア・マネージャーやホーム・ヘルパーの方々、調査に回答いただいた高齢者の方々に心より御礼申し上げます。また、本研究は文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号20730442)の助成を受けて実施され、一部は日本ヒューマンケア心理学会第12回大会(日本赤十字看護大学)、日本健康心理学会第23回大会(江戸川大学)において発表したものを再分析したものである。